

AFC フォーラム

第 10 回日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性

「国史のなかの『感情』—日本・中国・韓国—

主催：渥美国際交流財団関口グローバル研究会（SGRA）

共催：東北学院大学

2026 年 8 月 26 日（水）9：00～12：30

2026 年 8 月 27 日（木）9：00～12：30

於・東北学院大学五橋キャンパス

日本語、中国語、韓国語の同時通訳付き

趣 旨

「国史たちの対話」の目的は、日中韓それぞれの自国史研究者が対話し交流を深めることにより、知のプラットフォームを構築し、東アジアの国際関係をしばしば紛糾させてきた歴史認識問題を克服するための手掛かりを得ることにある。2016 年から対話を重ねてきた「国史たちの対話」は今回で第 10 回となり、また 10 周年を迎える。

今回は日中韓の国史における「感情」をテーマに取り上げる。人々の感情は、明らかに歴史を動かす要因となってきた。そして歴史認識もまた、感情という要素を抜きにしては理解できないものである。

日中韓は、歴史をめぐる国民感情レベルでの衝突を何度も経験してきた。グローバル化の進展やインターネットメディアが社会を大きく変えつつある中、今後もそうした事態がなくなるとは考えにくい。そこで、「感情」それ自体を対話の焦点とするのは有効と考えられる。日中韓の国民はお互いにどのような感情を抱いてきたのだろうか。戦争や植民地支配という過去の出来事は、日中韓の国民感情にどのようなインパクトを与えてきたのだろうか。

「感情」はしばしば「理性」と対比されるが、このような捉え方には留保する必要がある。自己を理性的とみなす者は、立場や意見が異なる者の言動や異議申し立てを感情的だと捉えがちである。しかし現実には、感情と理性とを明確に区別することは困難である。

感情というテーマ設定は、2023 年の第 8 回国史対話「20 世紀の戦争・植民地支配と和解はどのように語られてきたのか」の成果を踏まえたものでもある。この対話では、歴史認識がそれぞれの社会で記憶や学校教育、メディアを通じて形成されるものであり、歴史研究とは大きなギャップがあることが改めて確認できた。深刻なテーマにもかかわらず、日中韓の自国史研究者の間には驚くほど深い対話が生まれたが、それだけでは十分でないことも明らかになった。第 10 回となる今回の国史対話を通じて目指すのは、日中韓の自国史研究者が相手の国の「感情」を知るとともに、自国の「感情」をも知ることである。このような観点から対話をさらに深め、歴史認識問題に向き合う上での大きなヒントが見出されることを期待する。

プログラム

2026年8月26日(水)

第1セッション 【基調講演】

司会：金 キョンテ KIM Kyongtae (全南大学)

9:00 【開会趣旨】

劉 傑 LIU Jie (早稲田大学)

【基調講演】 「感情・歴史およびアイデンティティ」

—北東アジアの歴史叙述における国民偏見をいかに緩和するか—

葛 兆光 GE Zhaoguang (復旦大学)

本講演で北東アジア(中国・日本・韓国)に関わるいくつかの歴史的事件および歴史著作を事例として、次の三つの問題について考察する。第一に、異なる国民的感情がいかに歴史叙述を左右し、その結果として歴史叙述にどのような偏りが生じてきたのか。第二に、歴史の中でこれらの感情をいかに共感的に理解し、それらを理性的な歴史叙述の中にどのように適切に位置づけることができるのか。第三に、国境を越えて歴史叙述の視野を拡大し、「帰属意識」あるいは「アイデンティティ」と呼びうる感情的要素を相対化することで、歴史における「彼我の境界」が生み出してきた隔たりをいかに乗り越えることができるのかを考察する。

【フォーラムの趣旨】

塩出 浩之 SHIODE Hiroyuki (京都大学)

【基調講演】 「義憤の感情体制(emotional regime)—茶山 丁若鏞の『義殺論』」

金 澔 KIM Ho (ソウル大学)

18世紀、朝鮮王朝を統治した正祖は、「すべての人間は天から明るい本性〔明德〕を授かった」という朱子の教えに基づき、『万人の君子化』を統治の究極的な目標とした。以前は両班や士族にのみ求められていた「明明徳の修身」が、可能な限りすべての民に認められ、人生の目標として提示された。誰もが君子になる可能性は持っているが、誰もが君子になるわけではない。無論、社会が求める「義」を行えば、天から授かった君子の可能性を現実に実現することができる。不義に立ち向かったり、憤ったりする「義—しばしば暴力を伴う」は、正祖の感情統治において、重要な「管理の対象」であった。25年の治世の間に正祖が残した千件を超える殺人事件の「審理の記録〔審理録〕」は、正祖の感情統治の内実を示す思想史の資料である。それだけでなく、正祖の『審理録』に対する茶山丁若鏞の批評書〔欽欽新書〕は、18世紀から19世紀にかけての韓国の心性史(mentalité)を理解する重要な鍵である。

10:30

休憩(30分)

第2セッション 【発表「戦争と感情」】

司会：南 基正 NAM Kijeong (ソウル大学)

11:00 【発表1】 「軍事暴力と感情の統制」

中村 江里 NAKAMURA Eri (上智大学)

日中戦争・アジア太平洋戦争は、日本軍の侵略により国内外で多数の犠牲者を生んだ。アジア太平洋諸国では虐殺・放火・略奪・性暴力により数千万人の市民が犠牲となり、連合軍捕虜も約3割が死亡した。日本国内でも軍人230万人、民間人80万人が犠牲となり、その多くは終戦直前の一年間に集中し、軍人の死因も戦闘死より餓死・病死が多数を占める。これは戦争指導者が自国民の生命をも軽視し、終戦決定の遅れが被害を拡大させたことを示す。さらに植民地であった朝鮮・台湾出身の動員兵約5万人が死亡し、空襲・原爆の犠牲者にも強制連行された朝鮮人・中国人、連合軍捕虜、東南アジア留学生など多様な人々が含まれていた。

こうした戦争の加害・被害の諸相については歴史学等で研究が蓄積されてきたが、そこに関わる人々の感情への注目は十分とは言えず、戦争が生むトラウマと感情の歴史研究もアジア諸国では近年始まったばかりである。

本稿では、筆者のこれまでの研究をふまえ、日本軍将兵を対象に軍事暴力と感情の関係を論じる。感情史研究の成果を参照し、軍隊を「感情の共同体」として捉え、戦時下で兵士の感情がいかに動員され加害につながったかを考察するとともに、「本能」とみなされがちな感情に埋め込まれた政治的境界線についても検討する。

【発表2】 「戦争の感情と国家の自己再構築—韓中日における承認闘争の比較研究」

吳 承煥 OH Seung-he (国立外交院)

韓中日の歴史的葛藤は、単なる事実をめぐる争いではなく、戦時の苦痛に対する承認がなされないまま現在に至るなかで、国家間関係を規定し続ける承認闘争である。本研究は、ホネットの承認理論を分析の枠組みとして、各国が戦争の感情的遺産をいかにして現在の国家的自己再構築の企てへと転換しているかを考察する。各国は異なる感情変換のパターンを示す。日本においては、戦時の加害に対する罪責感と敗戦の恥辱を被害のナラティブに置き換えることで封印し、抑圧されたトラウマは歴史修正主義と「強い日本」への渴望として再び浮上する。韓国では、植民地支配の屈辱を脱植民地的な自己確立へと転換し、「韓流」が全世界的に獲得した承認を通じて集団の尊厳を回復する。中国は、「百年の屈辱」を中華文明の復興と「中国の夢」へと昇華させ、人類運命共同体の言説を通じて、承認を求める国家から代替的世界秩序を提案する文明主体へと自らを再定位する。

これら競合する自己企画は衝突しつつ、東アジアの承認政治の地形を新たに形成している。本研究は、東アジアにおける和解が歴史的事実の解決だけでは実現しえず、他者の苦痛を真に受け止めるにはまず各国が確かな自己承認を築かなければならないという逆説こそが、この地域の未完の歴史的清算の核心にあることを提示する。

【発表3】 「苦難・抵抗・超克：抗日戦争記憶をめぐる三つの叙事とその省察」

唐 小兵 TANG Xiaobing (華東師範大学)

本報告は、主として新世紀以降に刊行された回憶録およびオーラルヒストリーを基礎資料とし、苦難を経験した個人たちの叙事、日本の侵略に対する文化的志向をもつ抵抗の叙事、そして民族国家の境界を超える歴史的省察という三つの次元から、抗日戦争をめぐる歴史叙事の三類型を再検討するものである。個々人の生命の物語および生命の経験という視角を通して、中国の知識人、学生、民衆がいかに抗日戦争に起因する集合的経験と民族的トラウマを体験し、目撃し、かつ省察してきたのかを明らかにする。さらに、個人と国家、歴史と記憶、経験と理性、ナショナリズムとヒューマニズムといった複数の視座から、これら回顧録およびオーラルヒストリーが提示する内容について検討を加えることを目的とする。

2026 年 8 月 27 日 (木)

第 3 セッション 【発表「相互イメージ」】

司会：鄭 淳一 CHONG Soonil (高麗大学)

9:00 【発表 4】「近代日本の対中国感情—『文明／野蛮』『清潔／不潔』という枠組み」

金山 泰志 KANAYAMA Yasuyuki (横浜市立大学)

本報告は、近代日本における対中国感情の形成と変容を、「文明／野蛮」「清潔／不潔」という二項対立の枠組みから検討する。近年、日本人の対中印象は否定的評価が 9 割を超えるとの調査もあり、SNS 上では排外的言説が日常的に拡散している。こうした現在の感情を歴史的に相対化するため、知識人や国策レベルの中国観研究が扱いにくかった民衆の、より直接的で無意識的な「感情」に光を当てる。分析①では、明治から昭和戦前期までの主要な少年雑誌（『小国民』『少年世界』『日本少年』『少年倶楽部』）を史料に、戦争・外交の局面に応じて敵意・侮蔑が増幅される一方、孔孟など古典世界の中国偉人への敬愛も併存するという両義性を通史的に示す。少年雑誌が娯楽であると同時に感情教育の媒体であり、子どもに共有可能な「最大公約数」の感情構造を伝達した点に注目する。分析②では生活文化として中国料理受容を取り上げ、「不潔」評価が味覚や衛生の問題に還元できず、中国人や南京町など中国的空間への先入観と結びつき再生産された過程を論じる。さらに、19 世紀後半の衛生思想の浸透が「清潔＝文明」を強化し、日本の自己定位と他者化を支えたことを示し、感情史の視角が現代の日中関係をより冷静に、かつ多声的に語るための基盤となることを提起する。生成過程を可視化して示す。

【発表 5】「現代韓国の中国認識——歴史研究機関と国政監査、政治のうねり」

孫 成旭 SON Sungwook (昌原大学)

韓国の対中感情は、単一の起源を持たない。その底流をなしているのは、前近代の朝貢秩序における中華優位の経験、近代日本の植民地支配が残したヒエラルキーの経験、冷戦期のイデオロギー的敵対である。しかし、今日の感情はこうした歴史的形成過程だけでは説明できない。対外情勢の変化と国内政治の再編が繰り返し波動を引き起こし、歴史的に蓄積されてきた感情を再び呼び起こして新たな形に作り替えるからである。

この過程において、韓国の対中感情と対日感情は互いに連動している。両者は完全に独立して動くわけではなく、特定の局面ではシーソーゲームのように連動する傾向を見せる。反日感情が高まる局面では中国が歴史的連帯の対象として呼び出され、反中感情が強まる局面では日本との関係が改めて見直されることがある。こうした連動は偶然というよりも、韓国社会が前近代の中国優位と近代の日本優位という異なるヒエラルキーの経験を同時に抱えつつ克服してきた過程が、感情構造の中に刻み込まれた結果である。

本稿は、韓国の対中感情がいかに制度化され、政治の波動の中でいかに増幅・調整されるかに注目する。分析の中心に据えるのは、2006 年に設立された東北亜歴史財団である。国史編纂委員会、韓国学中央研究院、独立記念館などが研究・収集・教育を本分とするのに対し、東北亜歴史財団は当初から研究機関であると同時に、当面の課題に対応する機関として設計された。21 世紀初頭、中国の東北工程と日本の歴史教科書問題が同時に噴出し、この危機をめぐる政治力学がこの機関を誕生させた。その結果、財団は外交・政策・世論の接点に位置し、政治の波動にひととき敏感に反応する構造を持つこととなった。

本稿は、財団をめぐる国政監査資料を主要な分析対象とする。国政監査は、政治が歴史機関を呼び出す方式であり、歴史感情が政治言語として表出される場面である。いかなる争点がいかなる言語で表出されるか、対中議題と対日議題の比重が政権や時期によってどのように変化するか、歪曲・屈辱・憤怒といったネガティブな感情語彙がいかなる政治的条件の下で前景化するかを追跡する。さらに、そうした言語が財団の研究課題と事業の優先順位を経て、大衆の歴史認識にいかなる波紋を生むかを考察する。これを通じて、政治が歴史機関に及ぼす影響とその問題を再検討したい。

10:30

休憩 (30 分)

第4セッション 【指定討論と自由討論】

11:00
京大

モデレーター：彭浩 PENG Hao（大阪公立大学）、村和明 MURA Kazuaki（東京大学）

【指定討論1】朴三憲 PARK Sam hun（建国大学）

【指定討論2】宮間純一 MIYAMA Junichi（中央大学）

【指定討論3】馮淼 FENG Miao（中国社会科学院）

【自由討論】

【総括】

三谷博 MITANI Hiroshi（東京大学名誉教授）

12:30

閉会

登壇者紹介



葛兆光（かつちょうこう）/ GE Zhaoguang

1950年生まれ、北京大学卒業（1982年）、同大学院修了（1984年）。清華大学教授を経て（1992年）、復旦大学文史研究院の創設院長に就任（2007年）。

現職は、復旦大学文史研究院および歴史学系の文系上級教授。

専門分野は東アジアおよび中国の思想・文化・宗教史。

主な著作：『中国思想史』（全2巻、復旦大学出版社、1998・2001年、英語版・韓国語版あり）、『中国は“中国”なのか：「宅茲中国」のイメージと現実』（中華書局、2011年、英語版・韓国語版・日本語版・仏語版あり）、『完本 中国再考 領域・民族・文化』（香港オックスフォード大学出版社、2014年、日本語版・英語版・仏語版あり）、『歴史中国の内と外』（香港中文大学出版社、2017年、韓国語版・独語版あり）など。



金 滄（キム ホ）/ KIM Ho

ソウル大学国史学科を卒業後、同大学院で修士号および博士号を取得。ソウル大学奎章閣韓国学研究院責任研究員、京仁教育大学教授を経て、現職。

現職は、ソウル大学アジア研究所教授。

専門分野は朝鮮時代の知性史および社会文化史。主に朝鮮王朝の統治論と制度的実践の盛衰を探求している。

主な著作：『許浚の東医宝鑑研究』（2000年）をはじめ、『朝鮮王室の医療文化』（2017年）、『朝鮮の地方医局：公共の実践場』（2025年）など医療社会史の研究や、罪と罰をめぐる朝鮮の日常世界を研究した『丁若鏞、朝鮮の正義を語る』（2013年）、『100年前の殺人事件：検案を通じて見た朝鮮の日常史』（2018年）、そして『正祖の法治』（2020年）など。



中村 江里（なかむら えり）/ NAKAMURA Eri

1982年生まれ。上智大学文学部史学科を卒業後、一橋大学大学院で修士号及び博士号取得（社会学）。一橋大学大学院社会学研究科特任講師、日本学術振興会特別研究員PD、広島大学大学院人間社会科学研究科准教授を経て、2024年4月より現職。

現職は、上智大学文学部史学科准教授。

専門分野は日本近現代史、軍隊と精神医療の社会史、ジェンダー史。

主著に『戦争とトラウマ』（吉川弘文館、2018年）、『戦争と文化的トラウマ』（共著、日本評論社、2023年）、“Male Hysteria in Modern Japan: Trauma, Masculinity, and Military Psychiatry during the Asia-Pacific War” in *Traumatic Pasts in Asia* edited by Mark S. Micale and Hans Pols (New York: Berghahn Books, 2021)、 「『社会的苦しみ』としての戦争トラウマ」『BRAIN and NERVE』75巻9号、2023年など。

**吳 承煒 (オ スンヒ) / OH Seunghee**

2006 年梨花女子大学政治外交学科学士。2010 年梨花女子大学大学院東アジア学科修士。2016 年 梨花女子大学大学院政治外交学科博士課程修了。政治学博士。

現職は、国立外交院外交安保研究所助教授。

専門分野は日本外交政策、中日関係、東アジア国際関係。

主な著作：『東アジアの承認闘争——敗戦国日本・分断国家中国・植民地朝鮮の国交正常化』ソウル大学出版文化院（2023 年）、"From the Only A-Bombed Country to Global Peace Advocate: Japan's Diplomatic Identity Change in the Struggle for Recognition" The Korean Journal of International Studies 22-2 (Scopus, 2024.8)、『戦後中日関係 70 年——毛沢東・吉田期から習近平・安倍期まで』梨花女子大学出版文化院（共著、2019 年）

**唐 小兵 (とう しょうへい) / TANG Xiaobing**

湖南省出身。歴史学系教授。1997 年から 2001 年まで湖南大学人文社会科学系新聞学専攻にて学士課程を修め、2003 年から 2009 年まで華東師範大学歴史学系にて修士・博士課程を修了。

現職は、華東師範大学教授・博士課程指導教員。ハーバード大学燕京学社訪問研究員を経て、オンライン教育プラットフォーム APP「看理想」の音声講義「回憶録の中の 20 世紀中国」の講師を務める。2014 年、『東方歴史評論』による「中国傑出若手歴史学者」に選出、華東師範大学第 1 回若手教師育人貢献賞などを受賞。

専門分野は清末から民国初期の新聞・雑誌史、現代中国の知識人および思想文化史、左翼文化と中国革命、回憶録・オーラルヒストリーと 20 世紀中国史など。

主な著作：『裂け目の中を歩む：知識人と 20 世紀中国』（香港中文大学出版社、2025 年）などがあり、『中共党史研究』、『新聞與伝播研究』、『史林』、『読書』、『二十一世紀』（香港）、『思想』（台北）などに、特集論文および学術書評を含む 30 篇以上の論考を発表している。

**金山 泰志 (かなやま やすゆき) / KANAYAMA Yasuyuki**

2007 年横浜市立大学国際文化学部卒業。2009 年日本大学大学院文学研究科日本史専攻博士前期課程修了。2013 年日本大学大学院文学研究科日本史専攻博士後期課程修了。博士（文学）。

現職は、横浜市立大学国際教養学部准教授。

専門分野は日本近代史、メディア史。

主な著作：『明治期日本における民衆の中国観』（芙蓉書房、2014 年）、『近代日本の対中国感情』（中公新書、2025 年）、「近代日本の中国料理受容と対中感情」（『日本史研究』719 号、2022 年 7 月）

**孫 成旭 (ソン ソンウク) / SON Sungwook**

2005 年檀国大学史学科学士。2009 年北京大學歴史学系修士。2015 年北京大學歴史学系博士。歴史学博士。

現職は、国立昌原大学史学科副教授。

専門分野は中国近現代史、韓中関係史。

主な著作：『使臣に従い清に行く』（プルンヨクサ、2020 年）、『北京に来た西洋人、朝鮮と出会う』（東北亜歴史財団、2022 年）、「“盛極又衰”の円明園—朝鮮使臣の円明園経験を中心に」『清史研究』2015 年第 1 期、「清鮮関係における清朝礼制の緊張—康熙年間の清朝による朝鮮王世弟冊封を中心に」『文史哲』2018 年第 5 期、「‘外交’の亀裂と模索：1860～70 年代 清・朝関係」（韓国）『歴史学報』240、2018 年。「20 世紀‘宗藩関係’論の形成と変容」（韓国）『東洋史学研究』164、2023 年。

**朴 三憲(パク サムホン) / PARK samhun**

1995 年高麗大学日語日文学科 学士。2000 年神戸大学大学院日本史専攻修士。2003 年神戸大学大学院日本社会文化史専攻博士課程修了。文学博士。

現職は、建国大学日語教育学科教授、建国大学常虚記念図書館館長、常虚教養大学学部長。

専門分野は日本近代史。

主な著書：『天皇そして国民と臣民の間』、RHK, 2016. A New Modern History of East Asia(Co-authored), Vandenhoeck & Ruprecht GmbH & Co, 2017 年、『新・未来をひらく歴史』(共著)、高文研、2025 年

**宮間 純一(みやま じゅんいち) / MIYAMA Junichi**

2005 年中央大学文学部史学科日本史学専攻卒業。2007 年中央大学大学院文学研究科日本史学専攻博士前期課程修了。2012 年中央大学大学院文学研究科日本史学専攻博士後期課程修了。博士(史学)。

現職は、中央大学文学部教授。

専門分野は日本近代史、政治史・地域史。

主な著作：『明治維新という物語—政府が創る「国史」と地域の「記憶」』(中央公論新社、2025 年)、『戊辰内乱期の社会—「佐幕」と「勤王」のあいだ』(思文閣出版、2015 年)、『国葬の成立—明治国家と「功臣」の死』(勉誠出版、2015 年)

**馮 淼(ふう ひょう) / FENG Miao**

2003 年に中国人民大学歴史学系にて学士号を取得。2013 年にニューヨーク大学にて哲学博士を取得。

現職は、中国社会科学院近代史研究所副研究員。

専門分野は中国近現代史、革命および戦争の社会文化史。

主な著作：論文「〈読書生活〉と 1930 年代上海における都市革命文化の発展」(『文学評論』2019 年第 4 期)、「トランスナショナルな視野から見た中国農村問題—太平洋国際学会を中心とする考察」(『開放時代』2024 年第 4 期)、単著『近代中国における大衆教育の興起 1927-1937』(社会科学文献出版社、2023 年)など。

お問合せ先：AFC 事務局 afc2026@aisf.or.jp

AFC论坛

第10届日本·中国·韩国国史对话的可能性

《国史中的“情感”——日本·中国·韩国》

主办：渥美国際交流財団関口全球研究会（SGRA）

协办：东北学院大学

2026年8月26日（星期三）9:00~12:30（日本时间）

2026年8月27日（星期四）9:00~12:30（日本时间）

会场·东北学院大学五桥校区

配有日语、中文、韩语同声传译

主 旨

“国史对话”的宗旨在于，通过强化日中韩三国的本国史研究者之间的对话与交流，构建一个知识的平台，并为克服长期以来屡次导致东亚国际关系紧张的历史认识问题寻找线索。从2016年开始持续举行的“国史对话”，此次已是第10届会议，同时也迎来其10周年。

本次对话将以日中韩国史中的“情感”为主题。人们的情感一直是推动历史的重要因素。而历史认识同样无法脱离“情感”这一要素来加以理解。

日中韩三国在围绕历史的国民情感层面，已经经历了多次冲突。随着全球化的发展，以及互联网媒体对社会带来的巨大变化，今后此类情况恐怕仍难以避免。因此，将“情感”本身设为对话的焦点，可以说是一个切实而有效的选择。日中韩三国的国民彼此之间怀有怎样的情感？战争与殖民统治等过去的事件，究竟对日中韩三国的国民的情感产生了怎样的影响？

“情感”往往被视为与“理性”相对立，但对这种理解方式需要有所保留。自认为理性的人，往往容易把立场或意见不同者的言行及其反对意见视为“情感用事”。然而在现实中，情感与理性之间其实难以明确区分。

此次确立“情感”这一主题的背景，也承接了2023年第8届国史对话《20世纪的战争·殖民统治与和解的历史叙述—教育·媒介·研究》的成果。在那次对话中，我们再次确认：历史认识是在各自社会中，通过记忆、学校教育、媒体而形成的，这与历史研究之间存在极大的差距。尽管议题严峻，日中韩三国的本国史研究者之间却产生了令人惊叹的深度对话，但同时也发现，这样的对话仍然不够充分。在第10届“国史对话”中，我们所期望的，是让日中韩三国的本国史研究者不仅了解对方国家的“情感”，同时也认知自身国家的“情感”。在这一视角下进一步深化对话，必将为应对历史认识问题提供重要的启示。

会议日程

2026年8月26日（星期三）

第1场 【主题演讲】

主持：金罔泰 KIM Kyongtae（全南大学）

9:00 【举办主旨】

刘杰 LIU Jie（早稻田大学）

【主题演讲】《情感·历史与认同——如何淡化东北亚历史叙述中的国族偏见》

葛兆光 GE Zhaoguang（复旦大学）

这一演讲以东北亚（中日韩）的若干历史事件与历史著作为例，讨论三个问题：一，不同的国族情感，如何支配了历史叙述，使历史叙述出现了偏差？二，怎样在历史中同情地理解这些情感，并把这些情感妥善地安放在理性的历史叙述中？三，如何超越国境，扩大历史叙述的视野，淡化这种可以称之为“归属感”或者“认同感”的情感色彩，化解历史上“尔疆我界”造成的隔阂。

【论坛主旨】

盐出浩之 SHIODE Hiroyuki（京都大学）

【主题演讲】《义愤的情感体制（regime）——茶山丁若镛的“义杀论”》

金湍 KIM Ho（首尔大学）

18世纪统治朝鲜王朝的正祖，以朱子“明德者，人之所得乎天”的教诲为基础，将“万人的君子化”确立为统治的终极目标。原本仅对两班与士族所要求的“明明德之修身”，此时被尽可能扩展至所有的民众，并被倡导为人生的目标。尽管所有人都具备成为君子的可能性，但并非任何人皆可成为君子。诚然，若能践行社会所要求的“义行”，便可将上天赋予的君子之可能性转化为现实态。挺身反抗不义或对此感到愤怒的“义行——此类行为往往伴随着暴力——”在正祖的情感统治脉络中，属于重要的“管理对象”。正祖在二十五年的治世期间所留下的千余件与杀人案件相关的审理记录《审理录》，正是充分体现其情感统治的思想史料。不仅如此，茶山丁若镛针对正祖《审理录》所撰写的评论书《钦钦新书》，亦是解读18至19世纪韩国心态史，即mentalité的关键所在。

10:30 茶歇（30分）

第2场 【报告《战争与情感》】

主持：南基正 NAM Ki jeong（首尔大学）

11:00 【报告1】《军事暴力与情感的统制》

中村江里 NAKAMURA Eri（上智大学）

日中战争与亚洲太平洋战争由日本军队的侵略所引发，在日本国内外造成了大量人员伤亡。在亚洲太平洋各国，数千万平民因屠杀、纵火、掠夺和性暴力而丧生，盟军战俘的死亡比例也接近3成。日本国内同样有230万军人和80万平民死亡，其中多数死亡集中在战争结束前的最后一年。军人的死因中，饿死和病死的人数也远远超过战斗死亡。这表明，战争领导者漠视本国国民的生命，而迟迟未能作出结束战争的决定，进一步扩大了人员伤亡。

亡。此外，约有5万名从日本殖民地朝鲜·台湾被动员的军人死亡；空袭·原子弹爆炸的遇难者中，也包括被强制带到日本的朝鲜人·中国人、盟军战俘以及来自东南亚的留学生等具有不同背景的人群。

关于这场战争所造成的加害与受害的诸多面向，历史学等领域已经积累了大量研究成果。然而，对于身处其中的人们的情感，尚未给予充分关注；有关战争创伤及其情感史的研究，在亚洲各国也只是近年来才刚刚起步。

本文在笔者既有研究的基础上，以日本军队士兵为对象，探讨军事暴力与情感之间的关系。本文将参照情感史研究的相关成果，把军队视为一种“情感共同体”，考察战争时期士兵的情感如何受到动员，并由此参与和实施加害行为。同时，本文还将分析那些往往被视为“本能”的情感之中所含的政治性边界。

【报告2】《战争情感与国家自我重构：韩中日承认斗争比较研究》

吴承燾 OH Seung-he (国立外交院)

韩中日之间的历史冲突并非单纯事实层面的争端，而是在尚未实现对战时痛苦之承认的情况下延续至今，并界定了国家间关系的承认斗争。本研究以霍耐特的承认理论为分析框架，考察各国如何将战争的情感遗产转化为当下的国家自我重构工程。各国呈现出截然不同的情感转化模式。日本通过以受害者叙事进行替代，将对战时加害的负罪感与战败的耻辱感予以封存，而被压抑的创伤则以历史修正主义及对“强大日本”的渴望等形式重新浮现。韩国将殖民统治的屈辱转化为去殖民化的自我确立，并通过“韩流”在世界范围内获得的承认来恢复集体尊严。中国将“百年国耻”升华为中华文明的复兴与“中国梦”，并借助人类命运共同体话语，从一个寻求承认的国家，重新定位为提议替代性世界秩序的文明主体。

这些相互竞争的自我重构工程在冲突中重新塑造着东亚承认政治的格局。本研究提出，东亚的和解无法仅凭解决历史事实来实现，而取决于各国能否确立起足以真诚承认他者痛苦的稳固的自我承认——这一悖论正是该地区尚未完成的历史清算之核心所在。

【报告3】《苦难、抵抗与超越：抗战记忆的三种叙事及其反思》

唐小兵 TANG Xiaobing (华东师范大学)

主要以新世纪以来出版的一些回忆录和口述史作为主体资料，从对于苦难的个人化叙事、对日本入侵的文化取向抵抗叙事和超越民族国家边界的历史反思三个维度来重新审视对于抗战的历史叙事的三种类型，通过个体的生命故事和生命经验的视角，来建构中国的知识分子、学生和民众是如何亲历、见证和反思抗战导致的集体经验和民族创伤，进而试图在个体与国家、历史与记忆、经验与理性、民族主义与人道主义等多重视角来讨论这些回忆录和口述史所呈现的内容。

2026年8月27日（星期四）

第3场 【报告《相互印象》】

主持：郑淳一 CHONG Soonil (高丽大学)

9:00 【报告4】《近代日本的对华情感：“文明/野蛮”与“清洁/不洁”的框架》

金山泰志 KANAYAMA Yasuyuki (横滨市立大学)

本报告从“文明/野蛮”与“清洁/不洁”这两组二元对立的框架出发，考察近代日本对华情感的形成及其变化过程。近年来的调查显示，日本人对中国的印象中，否定性评价已超过九成；在社交媒体平台上，排外性言论也在日常化地扩散。为了在历史的维度上相对化当下的这种情感，本研究将关注民众所具有的更为直接且无意识性的“情感”，而这在以往知识分子论述或国家政策层面的中国观研究中较难充分把握。在分析①中，以明治至昭和战争前期的主要少年杂志（《小国民》《少年世界》《日本少年》《少年俱乐部》）为史料，

通史性地揭示出一种情感的两义性：一方面，随着战争与外交局势的变化，对中国的敌意与轻蔑不断被放大；另一方面，对孔子、孟子等古典世界中国伟人的敬仰也同时存在。本研究关注的是：少年杂志既是娱乐读物，同时也是情感教育的媒介，它向儿童传达了一种所能共享的“最大公约数式”的情感结构。在分析②中，本研究以作为生活文化的中国菜的接受为对象，探讨所谓“不洁”的评价并不能简单还原为味觉或卫生问题，而是在与对中国人以及南京町等“中国式空间”的既有刻板印象相结合的过程中不断被再生产的。此外进一步指出，19世纪后半叶卫生思想的渗透强化了“清洁=文明”的观念，从而支撑了日本的自我定位与对他者的区分。情感史的视角能够成为以更加冷静且多重的方式讨论现代日中关系的重要基础，并通过对其生成过程的可视化加以呈现。

【报告5】《现代韩国的对华认知：历史机构、国政监查与政治波动》

孙成旭 SON Sungwook (昌原大学)

韩国对华情感并非源于单一渊源。前近代朝贡秩序中中华优位的经验、近代日本殖民统治留下的等级记忆，以及冷战时期的意识形态对立，共同构筑了其底层基础。然而，仅凭这一历史形成过程，尚不足以解释今日之情感表现。对外局势的变化与国内政治的重组引发了周期性的波动，从而反复唤醒历史沉淀的情感，并将其塑造成新的形态。

在此过程中，韩国的对华情感与对日情感紧密相连。两者并非完全独立运作，而在特定局势下呈现出消长与联动的态势。当反日情绪高涨时，中国往往被召唤为历史连带的对象；而当反华情绪强化时，韩国社会又会重新审视与日本的关系。这种联动并非偶然，而是韩国社会在同时承载并克服前近代中国优位与近代日本优位这两类差异化等级经验的过程中，将其印刻于情感结构的结果。

本文着眼于韩国对华情感如何实现制度化，并在政治波动中如何被放大或调整。分析的核心对象是2006年成立的东北亚历史财团。如果说国史编纂委员会、韩国学中央研究院、独立纪念馆等机构以研究、收集、教育为基本职能，那么东北亚历史财团自成立之初便被定位为兼具研究职能与现实问题应对职能的机构。21世纪初，中国的东北工程与日本历史教科书问题同时爆发，围绕这一危机的政治动力学催生了该机构。其结果使该财团置身于外交、政策与舆论的交汇点，从而具备了对政治波动尤为敏感的结构。

本文以围绕该财团的国政监查资料为主要分析对象。国政监查既是政治介入历史机构的方式，亦是历史情感转化为政治话语进行呈现的场域。本文旨在追踪各类议题以何种话语呈现，对华议题与对日议题的比重如何随政权与时期变化而演变，以及歪曲、屈辱、愤怒等负面情感词汇在何种政治条件下全面显现。进而探讨这些话语如何通过财团的研究议题与业务优先顺序，对民众的历史认知产生何种波澜。通过上述分析，本文拟重新审视政治对历史机构产生的影响及其潜藏的问题。

10:30 茶歇 (30分)

第4场 【指定讨论与自由讨论】

11:00

彭浩 PENG Hao (大阪公立大学)、村和明 MURA Kazuaki (东京大学)

【指定讨论1】 朴三宪 PARK Sam hun (建国大学)**【指定讨论2】** 宫间纯一 MIYAMA Junichi (中央大学)**【指定讨论3】** 冯淼 FENG Miao (中国社会科学院)**【自由讨论】****【总结】**

三谷博 MITANI Hiroshi (东京大学名誉教授)

12:30 闭会

嘉宾简介

**葛兆光 / GE Zhaoguang**

1950年生，北京大学本科（1982年）、研究生（1984年）毕业，曾任清华大学教授（1992年）复旦大学文史研究院创院院长（2007年）。

现任复旦大学文史研究院及历史系文科资深教授。

研究领域是东亚及中国的思想、文化与宗教史。

主要著作：《中国思想史》两卷本（复旦大学出版社，1998、2001年；英文版、韩文版）；《宅兹中国——重建有关“中国”的历史论述》（中华书局，2011年；英文版、韩文版、日文版、法文版）；《何为中国：疆域、族群、文化与历史》（香港牛津大学出版社，2014年；日文版、英文版、法文版）；《历史中国的内与外》（香港中文大学出版社，2017年；韩文版、德文版）等。

**金滹 / KIM Ho**

毕业于首尔大学国史学系，并于同校研究生院取得硕士及博士学位。

历任首尔大学奎章阁韩国学研究院责任研究员、京仁教育大学教授，现任首尔大学亚洲研究所教授。

研究领域为朝鲜时代思想史及社会文化史。主要探究朝鲜王朝统治论与制度实践的盛衰。

主要著作：《许浚的东医宝鉴研究》（2000年）；《朝鲜王室的医疗文化》（2017年）；《朝鲜的地方医局：公共的实践场》（2025年）等医疗社会史研究，以及探讨围绕罪与罚的朝鲜日常世界的《丁若镛，讲述朝鲜的正义》（2013年）；《百年前的杀人案：透过检案所见之朝鲜日常史》（2018年）和《正祖的法治》（2020年）等。

**中村江里 / NAKAMURA Eri**

1982年生。毕业于上智大学文学部史学科，后于一桥大学大学院获得硕士学位及博士学位（社会学）。曾任一桥大学大学院社会学研究科特任讲师、日本学术振兴会特别研究员PD、广岛大学大学院人间社会科学研究科副教授，2024年4月起任上智大学文学部史学科副教授。

研究领域为日本近现代史、军队与精神医疗的社会史、性别史。

主要著作：《战争与创伤》（吉川弘文馆，2018年）、《战争与文化创伤》（合著，日本评论社，2023年）、“Male Hysteria in Modern Japan: Trauma, Masculinity, and Military Psychiatry during the Asia-Pacific War”，收入 Mark S. Micale 与 Hans Polz 编 Traumatic Pasts in Asia (New York: Berghahn Books, 2021)，以及《作为“社会性痛苦”的战争创伤》（《BRAIN and NERVE》第75卷第9号，2023年）等。

**吴承熿 / OH Seunghee**

2006年获梨花女子大学政治外交学系学士学位。2011年获梨花女子大学研究生院东亚学系硕士学位。2016年结业于梨花女子大学研究生院政治外交学系博士课程。政治学博士。

现任国立外交院外交安保研究所助理教授。

研究领域为日本外交政策、中日关系、东亚国际关系。

主要著作：《东亚承认斗争：战败国日本、分裂国中国、殖民地韩国的邦交正常化》（首尔大学出版文化院，2023年）；From the Only A-Bombed Country to Global Peace Advocate: Japan's Diplomatic Identity Change in the Struggle for Recognition, The Korean Journal of International Studies 22-2 (Scopus, 2024年8月)；《战后中日关系70年：从毛泽东-吉田时期到习近平-安倍时期》（合著）（梨花女子大学出版文化院，2019年）。

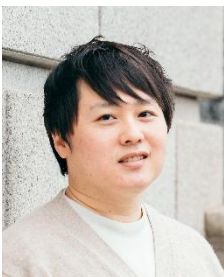
**唐小兵 / TANG Xiaobing**

湖南人，历史学系教授，1997年至2001年本科就读于湖南大学人文社科系新闻专业，2003年至2009年硕博士就读华东师范大学历史学系。

现任华东师范大学教授，博士生导师。哈佛燕京访问学者，看理想APP音频课《回忆录里的二十世纪中国》主讲人，曾入选《东方历史评论》2014中国杰出青年历史学人，曾获华东师范大学首届青年教师育人贡献奖等。

主要研究领域为晚清民国的报刊史、现代中国知识分子与思想文化史、左翼文化与中国革命、回忆录、口述史与20世纪中国等。

主要著作：《行走在裂隙当中：知识人与二十世纪中国》（香港中文大学出版社，2025）等，在《中共党史研究》、《新闻与传播研究》、《史林》、《读书》、《二十一世纪》（香港）、《思想》（台北）发表专题论文和学术书评等30余篇。

**金山泰志 / KANAYAMA Yasuyuki**

2007年毕业于横滨市立大学国际文化学系。2009年获日本大学研究生院文学研究科日本史专业硕士学位。2013年获日本大学研究生院文学研究科日本史专业博士学位，文学博士。

现任横滨市立大学国际教养学系副教授。

研究领域为日本近代史、媒体史。

主要著作：《明治时期日本民众的中国观》（芙蓉书房，2014年）；《近代日本的对华情感》（中公新书，2025年）；〈近代日本对中国菜的接受与对华情感〉（《日本史研究》第719号，2022年7月）。

**孙成旭 / SON Sungwook**

2005年获檀国大学史学系学士学位。2009年获北京大学历史学系硕士学位。2015年获北京大学历史学系博士学位。历史学博士。

现任国立昌原大学史学系副教授。

研究领域为中国近现代史、韩中关系史。

主要著作：《跟随使臣前往清朝》（蔚蓝历史出版社，2020年）；《来到北京的西方人，与朝鲜邂逅》（东北亚历史财团，2022年）；〈“盛极又衰”的圆明园——以朝鲜使臣的圆明园经验为中心〉（《清史研究》2015年第1期）；〈清鲜关系中清朝礼制的张力——以康熙年间清朝册封朝鲜王世弟为中心〉（《文史哲》2018年第5期）；〈“外交”的龟裂与摸索：1860-70年代清朝与朝鲜关系〉（韩国《历史学报》240，2018年）；〈20世纪“宗藩关系”论的形成与变容〉（韩国《东洋史学研究》164，2023年）。

**朴三宪 / PARK samhun**

1995年获高丽大学日语日文学系学士学位。2000年获神户大学研究生院日本史专业硕士学位。2003年获神户大学研究生院日本社会文化史专业文学博士学位。

现任建国大学日语教育系教授、建国大学常虚纪念图书馆馆长、常虚教养学院院长。

研究领域为日本近代史。

主要著作：《天皇：在国民与臣民之间》（RHK出版社，2016年）；A New Modern History of East Asia（合著）（Vandenhoeck & Ruprecht出版社，2017年）；《新·开启未来的历史》（合著）（高文研出版社，2025年）。



宫间纯一 / MIYAMA Junichi

2005年毕业于中央大学文学部史学科日本史学专业。2007年获中央大学研究生院文学研究科日本史学专攻硕士学位。2012年获中央大学研究生院文学研究科日本史学专攻博士学位，史学博士。

现任中央大学文学部教授。

研究领域为日本近代史、政治史・地域史。

主要著作：《作为叙事的明治维新：政府所建构的“国史”与地域的“记忆”》（中央公论新社，2025年）；《戊辰内乱期的社会：在“佐幕”与“勤王”之间》（思文阁出版，2015年）；《国葬的成立：明治国家与“功臣”之死》（勉诚出版，2015年）。



冯淼 / FENG Miao

2003年中国人民大学历史学系获学士学位。2013年获纽约大学获哲学博士学位。

现任中国社会科学院近代史研究所副研究员。

研究领域为中国近现代史、革命与战争社会文化。

主要著作有：〈〈读书生活〉与三十年代上海城市革命文化的发展〉（《文学评论》2019年第4期）；《跨国视野下的中国农村问题——以太平洋国际学会为中心的考察》（《开放时代》2024年第4期）；专著《近代中国大众教育的兴起，1927-1937》（社会科学文献出版社，2023年）等。

联系方式：AFC事務局 afc2026@aisf.or.jp

AFC 포럼

제10회 일본·중국·한국 국사들의 대화 가능성

「국사 속의 '감정'——일본·중국·한국」

주최: 아쓰미국제교류재단 세키구치글로벌연구회(SGRA)

공동주최: 도호쿠학원대학

2026년8월26일(수) 9:00~12:30

2026년8월27일(목) 9:00~12:30

장소: 도호쿠학원대학 이쓰쓰바시캠퍼스

일본어, 중국어, 한국어 동시통역 제공·참가 무료

취 지

'국사들의 대화' 기획은 한중일 '국사' 연구자의 교류를 심화함으로써 지(知)의 플랫폼을 구축해, 동아시아 국제관계를 종종 혼란에 빠뜨려온 역사인식 문제를 극복하기 위한 실마리를 얻는 것을 목적으로 한다. 2016년부터 대화를 이어온 '국사들의 대화'는 이번이 제10회이자 10주년을 맞는다.

이번 대화에서는 한중일 국사에서의 '감정'을 주제로 다룬다. 사람들의 감정은 분명히 역사를 움직이는 요인이었다. 그리고 역사인식 역시 감정이라는 요소를 빼고는 이해할 수 없는 것이다.

한중일은 이미 역사를 둘러싼 국민 감정 차원의 충돌을 여러 차례 겪어왔다. 세계화의 진전이나 인터넷 미디어가 사회를 크게 변화시키고 있는 가운데, 앞으로도 그런 사태가 없어질 것으로 생각하기는 어렵다. 따라서 '감정' 그 자체를 대화의 초점으로 삼는 것이 유효하다고 여겨진다. 전쟁이나 식민지 지배라는 과거의 사건은 한중일의 국민 감정에 어떤 영향을 끼쳐왔을까? 또한 애초에 한중일 국민은 서로에 대해 어떤 감정을 품어왔을까?

한편 '감정'은 흔히 '이성'과 대비되지만, 이러한 인식에는 신중할 필요가 있다. 자신을 이성적이라고 여기는 사람은 입장이나 의견이 다른 이의 언행, 혹은 이의 제기를 감정적이라고 받아들이기 쉽다. 하지만 현실에서는 감정과 이성을 명확히 구별하기가 어렵다.

'감정'이라는 주제 설정은 2023년 제8회 국사들의 대화 "20세기의 전쟁·식민지 지배와 화해는 어떻게 이야기되어 왔는가"의 성과를 토대로 한 것이기도 하다. 이 대화에서는 역사인식이 각 사회에서 기억이나 학교교육, 미디어를 통해 형성되는 것이며, 역사 연구와는 큰 격차가 있음을 다시금 확인할 수 있었다. 심각한 주제였음에도 한중일 자국사 연구자들 사이에 놀라울 정도로 깊은 대화가 이루어졌지만, 그것만으로는 충분하지 않다는 점도 분명해졌다. 제10회 국사들의 대화의 목표는 한중일 자국사 연구자들이 상대국의 '감정'을 알아가는 동시에 자국의 '감정'도 알아가는 데 있다. 이러한 관점에서 대화를 더욱 심화하여 역사인식 문제에 맞서는 데 큰 힌트를 발견하기를 기대한다.

프로그램

2026년 8월 26일(수)

제1세션 【기조강연】

사회: 김경태(金罔泰 KIM Kyongtae 전남대학교)

9 : 00 【개회취지】

류지에(劉傑 LIU Jie 와세다대학)

【기조강연】 「감정·역사 및 아이덴티티

—동북아시아의 역사서술에서 국족(國族) 편견을 어떻게 완화할 것인가—

거자오광(葛兆光 GE Zhaoguang 푸단대학)

본 강연에서는 동북아시아(중국·일본·한국)에 관련된 몇 가지 역사적 사건 및 역사 저작을 사례로 삼아 다음 세 가지 문제에 대해 고찰한다. 첫째, 서로 다른 국족적 감정이 역사서술을 어떻게 좌우하며, 그 결과 역사서술에 어떤 편향이 생겨왔는가. 둘째, 역사 속의 이러한 감정을 어떻게 공감적으로 이해하고, 이를 이성적 역사서술 속에 적절히 자리매김할 수 있는가. 셋째, 국경을 넘어 역사서술의 시야를 넓히고, '귀속감' 혹은 '정체성'이라 부를 수 있는 감정적 색채를 완화함으로써, 역사 속 '이강아계(爾疆我界, 역사적으로 형성된 배타적인 경계 의식)'가 초래해 온 간극을 어떻게 해소할 수 있는가를 고찰한다.

【포럼의 취지】

시오데 히로유키(塩出浩之 SHIODE Hiroyuki 교토대학)

【기조강연】 「義憤의 感情 레짐(regime) - 茶山 丁若鏞의 '義殺論」

김호(金澮 KIM Ho 서울대학교)

18세기 조선 왕조를 통치하게 된 정조 임금은 '모든 인간은 밝은 도덕성[明德]'을 지니고 있다는 주자학의 가르침 하에, <萬人の 君子化>를 통치의 궁극적인 목표로 삼았다. 이전에는 양반/사족들에게 요구되었던 '明明德의 修身'은 가능한 모든 인민들에게 허용되었고, 삶의 목표로 제시되었다. 모두가 군자가 될 가능성이 있었지만, 누구나 군자가 되는 것은 아니었다. 물론 사회가 요구하는 '의로운 행위'를 실천한다면, 하늘로부터 부여받은 군자의 가능성을 현실태로 전환할 수 있었다. 不義에 맞서거나 이에 분노하는 '의로운 행동-자주 폭력을 동반하는'-은 정조의 감정 통치와 관련하여, 중요한 '관리 대상'이었다. 25년의 치세 동안 정조가 남긴 천 여건이 넘는 살인 사건 관련 '審理의 기록[審理錄]'은 정조의 감정 통치를 잘 보여주는 사상사의 재료이다. 이뿐 아니라 정조의 <심리록>에 대한 다산 정약용의 비평서[欽欽新書]는 18세기~19세기 한국의 심성사(心性史), 즉 망탈리테(mentalité)를 이해하는 중요한 열쇠이다.

10 : 30 휴식(30분)

제2세션 **【발표 「전쟁과 감정」】**

사회: 남기정(南基正 NAM Kijeong 서울대학교)

11 : 00 **【발표1】 「군사폭력과 감정의 통제」**

나카무라 에리(中村江里 NAKAMURA Eri 조치대학)

종일전쟁과 아시아·태평양전쟁은 일본군의 침략으로 국내외에서 수많은 희생자를 낳았다. 아시아·태평양 각국에서는 학살·방화·약탈·성폭력으로 수천만 명의 시민이 희생되었고, 연합군 포로도 약 30%가 사망했다. 일본 국내에서도 군인 230만 명, 민간인 80만 명이 희생되었는데, 그 다수는 종전 직전 1년간에 집중되었으며, 군인의 사인 역시 전사보다 아사나 병사가 다수를 차지한다. 이는 전쟁 지도자들이 자국민의 생명마저 경시했으며, 종전 결정의 지연이 피해를 확대시켰음을 보여준다. 나아가 식민지였던 조선·타이완 출신의 동원 병사 약 5만 명이 사망했으며, 공습과 원폭의 희생자 중에도 강제 연행된 조선인·중국인, 연합군 포로, 동남아시아 유학생 등 다양한 사람들이 포함되어 있었다.

이와 같은 전쟁의 가해와 피해의 다양한 양상에 대해서는 역사학을 비롯한 여러 분야에서 연구가 축적되어 왔지만, 그에 관련된 사람들의 감정에 대해서는 충분히 주목되었다고 하기 어려우며, 전쟁으로 인한 트라우마와 감정의 역사 연구도 아시아 각국에서는 최근에서야 시작 단계에 들어섰다.

본 발표에서는 필자가 그간에 연구해온 내용을 바탕으로 일본군 장병을 대상으로 군사폭력과 감정의 관계를 논한다. 감정사 연구의 성과를 참조하여 군대를 '감정공동체'로 파악하고, 전시하에서 병사들의 감정이 어떻게 동원되어 가해로 이어졌는지를 고찰하는 동시에, '본능'으로 간주되기 쉬운 감정에 새겨진 정치적 경계선에 대해서도 검토한다.

【발표2】 「전쟁의 감정과 국가의 자기 재구성: 한중일 인정투쟁 비교연구」

오승희(吳承熺 OH Seunghee 국립외교원)

한·중·일의 역사적 갈등은 단순한 사실 다툼이 아니라, 전시 고통에 대한 인정이 이루어지지 않은 채 현재까지 지속되며 국가 간 관계를 규정하는 인정투쟁이다. 본 연구는 호네토키의 인정 이론을 분석 틀로 삼아, 각국이 전쟁의 감정적 유산을 어떻게 현재의 국가적 자기 재구성 기획으로 전환하는지를 고찰한다. 각국은 서로 다른 감정 변환의 패턴을 보인다. 일본은 전시 가해에 대한 죄책감과 패전의 수치를 피해자 서사로 대체함으로써 봉인하며, 억압된 트라우마는 역사 수정주의와 '강한 일본'에 대한 열망으로 재부상한다. 한국은 식민지 지배의 굴욕을 탈식민적 자기 확립으로 전환하고, 한류가 전 세계적으로 획득한 인정을 통해 집단적 존엄을 회복한다. 중국은 '백년 굴욕'을 중화문명의 부흥과 중국몽으로 승화시키며, 인류운명공동체 담론을 통해 인정을 요구하는 국가에서 대안적 세계 질서를 제안하는 문명 주체로 스스로를 재정립한다. 이 경쟁하는 자기 기획들은 충돌하면서 동아시아 인정 정치의 지형을 새롭게 형성하고 있다. 본 연구는 동아시아의 화해가 역사적 사실의 해결만으로는 불가능하며, 각국이 타자의 고통을 진정으로 인정할 수 있을 만큼의 자기 인정을 확립할 수 있는가에 달려 있다는 역설을 이 지역의 미완의 역사적 청산의 핵심으로 제시한다.

【발표3】 「고난, 저항과 초월: 항일전쟁 기억의 세 가지 서사와 그에 대한 성찰」

탕샤오빙(唐小兵 TANG Xiaobing 화동사범대학)

본 강연은 주로 새 세기 이후 출간된 회고록과 구술사를 핵심 자료로 삼아, 고난에 대한 개인화된 서사, 일본 침략에 맞선 문화적 지향의 저항 서사, 그리고 민족국가의 경계를 넘어서는 역사적 성찰이라는 세 가지 차원에서 항전(抗戰)의 역사 서사가 취하는 세 가지 유형을 재고찰한다. 개인의 생애 이야기와 삶의 경험이라는 시각을 통하여, 중국의 지식인, 학생, 민중이 항전으로 빚어진 집단적 경험과 민족적 트라우마를 어떻게 직접 체험하고 목도하며 성찰했는지를 밝힌다. 나아가 개인과 국가, 역사와 기억, 경험과 이성, 민족주의와 인도주의 등 다층적 시각에서 이들 회고록과 구술사가 담아낸 내용을 심층적으로 논의하고자 한다.

2026년 8월 27일(목)

제3세션 【발표 「상호 이미지」】

사회: 정순일(鄭淳一 CHONG Soonil 고려대학교)

9 : 00 【발표4】 근대 일본의 대중국 감정—'문명/야만' '청결/불결'이라는 프레임

가나야마 야스유키(金山泰志 KANAYAMA Yasuyuki 요코하마시립대학)

본 보고는 근대 일본의 대중국 감정이 어떻게 형성되고 변화해 왔는지를 ‘문명/야만’, ‘청결/불결’이라는 이항대립의 틀에서 검토한다. 최근 조사에 따르면 일본인의 대중국 인식은 부정적 평가가 90%를 넘으며, SNS에서는 배외적 언설이 일상적으로 확산되고 있다. 이러한 현재의 감정을 역사적으로 상대화하기 위해, 지식인이나 국가 정책 차원의 중국관 연구에서는 다루기 어려웠던 민중의 더욱 직접적이고 무의식적인 ‘감정’에 주목한다. 분석①에서는 메이지부터 쇼와 전전기까지의 주요 소년 잡지(『소국민(小國民)』, 『소년세계(少年世界)』, 『일본소년(日本少年)』, 『소년구락부(少年俱樂部)』)를 사료로 삼아, 전쟁·외교 국면에 따라 적의와 멸시가 증폭되는 한편 공자와 맹자 등 고전 세계의 중국 위인에 대한 존경과 애정이 공존하는 양의성을 통시적으로 제시한다. 소년 잡지가 오락인 동시에 감정 교육의 매체로서, 아이들에게 공유 가능한 ‘최대공약수’의 감정 구조를 전달했다는 점에 주목한다. 분석②에서는 생활문화로서 중국 요리의 수용을 다룬다. ‘불결’이라는 평가가 미각이나 위생의 문제로 환원될 수 없으며, 중국인이나 난킨마치(南京町) 등 중국적 공간에 대한 선입견과 결합하여 재생산된 과정을 논한다. 나아가 19세기 후반 위생 사상의 침투가 ‘청결=문명’이라는 등식을 강화하고, 일본의 자기 규정과 타자화를 뒷받침했음을 보여준다. 이를 통해 감정사의 시각이 현대 한중일 관계를 더욱 냉정하고 다성적으로 논하기 위한 기반이 될 수 있음을 제기하며, 그 생성과정을 가시화해서 제시하려 한다.

【발표5】 「현대 한국의 중국 인식: 역사기관과 국정감사, 정치의 파동」

손성욱(孫成旭 SON Sungwook 창원대학교)

한국의 중국 감정은 단일한 기원을 갖지 않는다. 전근대 조공 질서 속 중화 우위의 경험, 근대 일본 식민 지배가 남긴 위계 기억, 냉전기 이념 적대감이 그 밑바탕을 이룬다. 오늘의 감정은 그러나 이 역사적 형성 과정만으로는 설명되지 않는다. 대외 정세의 변화와 국내 정치의 재편이 반복적인 파동을 일으키며, 역사적으로 누적된 감정을 다시 불러내어 새로운 형태로 빚어내기 때문이다.

이 과정에서 한국의 중국 감정과 일본 감정은 서로 연결되어 있다. 양자는 완전히 독립적으로 움직이지 않는다. 특정 국면에서 시소처럼 맞물리는 경향을 보인다. 반일 감정이 고조될 때 중국이 역사적 연대의 대상으로 호출되기도 하고, 반중 정서가 강화될 때 일본과의 관계가 새롭게 재조명되기도 한다. 이러한 연동은 우연이라기보다, 한국 사회가 전근대의 중국 우위와 근대의 일본 우위라는 서로 다른 위계 경험을 동시에 안고 극복해 온 과정이 감정 구조 속에 각인된 결과일 수 있다.

본고는 한국의 대중(對中) 감정이 어떻게 제도화되고, 정치의 파동 속에서 어떻게 증폭·조정되는가에 주목한다. 분석의 중심에 놓는 것은 2006년 설립된 동북아역사재단이다. 국사편찬위원회, 한국학중앙연구원, 독립기념관 등이 연구·수집·교육을 본령으로 한다면, 동북아역사재단은 처음부터 연구기관이자 현안 대응 기관으로 설계되었다. 21세기 초 중국의 동북공정과 일본의 역사 교과서 문제가 동시에 폭발하던 위기의 정치학이 이 기관을 낳았다. 그 결과 재단은 외교·정책·여론의 접점에 놓였고, 정치의 파동에 유달리 민감하게 흔들리는 구조를 갖게 되었다.

본고는 재단을 둘러싼 국정감사 자료를 주요 분석 대상으로 삼는다. 국정감사는 정치가 역사기관을 호출하는 방식이자, 역사 감정이 정치 언어로 드러나는 장면이다. 어떤 이슈가 어떤 언어로 표출되는지, 대중(對中) 의제와 대일(對日) 의제의 비중이 정권과 시기에 따라 어떻게 달라지는지, 왜곡, 굴욕, 분노 같은 부정적 감정 어휘가 어떤 정치적 조건에서 전면화되는지를 추적한다. 나아가 그 언어가 재단의 연구 의제와 사업 우선순위를 거쳐 대중의 역사 인식에 어떤 파장을 만드는지를 살펴본다. 이를 통해 정치가 역사기관에 끼치는 영향과 그 문제를 되짚어보고자 한다.

10 : 30 휴식(30분)

제4세션 【지정토론과 자유토론】

11:00 사회: 평하오(彭浩 PENG Hao 오사카공립대학), 무라 가즈아키(村和明 MURA Kazuaki 도쿄대학)

【지정토론1】 박삼헌(朴三憲 PARK Sam hun 건국대학교)

【지정토론2】 미야마 준이치(宮間純一 MIYAMA Junichi 주오대학)

【지정토론3】 평마오(馮淼 Feng Miao 사회과학원)

【자유토론】

【총괄】

미타니 히로시(三谷博 MITANI Hiroshi 도쿄대학 명예교수)

12 : 30 폐회

발표자 소개



거자오광(葛兆光) / GE Zhaoguang

1950년생. 베이징대학교 학부(1982) 및 대학원(1984) 졸업. 칭화대학교 교수(1992), 푸단대학교 문사연구원 초대 원장(2007) 역임. 현재 푸단대학교 문사연구원 및 역사학과 석좌교수로 재직 중. 주요 연구 분야는 동아시아와 중국의 사상·문화·종교사.

주요 저작으로 『중국사상사』 (전 2권, 푸단대학출판사, 1998·2001 / 영문판·한글판), 『택자중국: 중국에 관한 역사적 담론의 재구축』 (중화서국, 2011 /

영문판·한글판·일문판·불문판), 『무엇이 중국인가: 강역, 종족, 문화와 역사』 (홍콩 옥스퍼드 대학출판사, 2014 / 일문판·영문판·불문판), 『역사적 중국의 안과 밖』 (홍콩 중문대학출판사, 2017 / 한글판·독문판) 등.

제1회 중국도서상(1988), 제1회 장강독서상(2000), 제26회 일본 아시아·태평양 대상(2014), 제3회 한국 파주 북어워드(2014), 제8회 홍콩도서상(2015), 제3회 사면독창상(2015), 제7회 오욱장 인문사회과학 일등상(2017) 등 수상. 2009년 미국 프린스턴대학교의 제1회 프린스턴 글로벌 스칼라(Princeton Global Scholar)로 선정. 2022년 홍콩교육대학교에서 명예 인문학 박사 학위 취득.



김호(金澔) / KIM Ho

서울대학교 국사학과 졸업 후 동 대학원에서 석사 및 박사학위 취득. 서울대학교 규장각한국학연구원 책임연구원, 경인교육대학교 교수를 거쳐 현 서울대학교 아시아연구소 교수.

전공 분야는 조선시대 지성사, 사회문화사. 주로 조선 왕조의 통치론과 제도적 실천의 성쇠를 탐구 중. 주요 저작으로 『허준의 동의보감 연구』 (2000)을 비롯해 『조선왕실의 의료문화』 (2017), 『조선의 지방 醫局: 공공의 실천장』 (2025) 등 의료사회사 연구와, 죄와 벌을 둘러싼 조선의 일상세계를 연구한 『정약용, 조선의 정의를 말하다』 (2013)와 『100년 전 살인사건: 檢案을 통해 본 조선의 일상사』 (2018) 그리고 『정조의 법치』 (2020) 등.



나카무라 에리(中村江里) / NAKAMURA Eri

1982년 출생. 조치대학 문학부 사학과 졸업 후 히토쓰바시대학 대학원에서 석사 및 박사학위 취득(사회학). 히토쓰바시대학 대학원 사회학연구과 특임강사, 일본학술진흥회 특별연구원 PD, 히로시마대학 대학원 인간사회과학연구과 준교수를 거쳐 2024년 4월부터 조치대학 문학부 사학과 준교수.

전공은 일본 근현대사, 군대와 정신의료의 사회사, 젠더사.

주요 저서로 『전쟁과 트라우마』(요시카와코분칸, 2018년), 『전쟁과 문화적 트라우마』(공저, 니혼호론샤, 2023년), "Male Hysteria in Modern Japan: Trauma, Masculinity, and Military Psychiatry during the Asia-Pacific War" in Traumatic Pasts in Asia, edited by Mark S. Micale and Hans Pols (New York: Berghahn Books, 2021), 「'사회적 고통'으로서의 전쟁 트라우마」(『BRAIN and NERVE』 75권 9호, 2023년) 등.



오승희(吳承熿) / OH Seunghee

2006년 이화여자대학교 정치외교학과 학사. 2010년 이화여자대학교대학원 동아시아학과 석사. 2016년 이화여자대학교 대학원 정치외교학과 박사과정 수료. 정치학 박사.

현재 국립외교원 외교안보연구소 조교수.

전공 분야는 일본 외교정책, 중일관계, 동아시아 국제관계. 주요 저작으로 『동아시아 인정투쟁: 패전국 일본, 분단국 중국, 식민지 한국의 국교정상화』 서울대학교출판문화원 (2023) From the Only A-Bombed Country to Global Peace Advocate: Japan's Diplomatic Identity Change in the Struggle for Recognition." The Korean Journal of International Studies 22-2 (Scopus, 2024.8) 『전후 중일관계 70년: 마오쩌둥-요시다 시기부터 시진핑-아베 시기까지』 이화여자대학교 출판문화원 (공저, 2019)



탕샤오빙(唐小兵) / TANG Xiaobing

후난성 출신. 역사학계 교수. 1997년부터 2001년까지 후난대학교 인문사회과학계 신문학 전공에서 학사과정을 마쳤으며, 2003년부터 2009년까지 화둥사범대학교 역사학계에서 석사·박사과정을 수료하였다.

현직은 화둥사범대학교 교수·박사과정 지도교수. 하버드대학 옌칭학사 방문연구원을 역임했으며, 온라인 교육 플랫폼 APP '칸리상(看理想)'의 오디오 강의 「회고록 속의 20세기 중국」 강사를 맡고 있다. 2014년 『동방역사평론』 선정 「중국 걸출 청년 역사학자」, 화둥사범대학교 제1회 청년 교사 육성 공헌상 등을 수상하였다.

전공 분야는 만청부터 민국 초기의 신문·잡지사, 현대 중국의 지식인 및 사상문화사, 좌익 문화와 중국 혁명, 회고록·구술사와 20세기 중국사 등이다.

주요 저서로 『틈새를 걷다: 지식인과 20세기 중국』(홍콩중문대학출판사, 2025) 등이 있으며, 『중공당사연구』, 『신문여전파연구』, 『사림』, 『독서』, 『21세기』(홍콩), 『사상』(타이베이) 등에 특집 논문 및 학술 서평을 포함한 30편 이상의 논고를 발표하였다.



가네야마 야스유키(金山泰志) / KANAYAMA Yasuyuki

2007년 요코하마시립대학 국제문화학부 졸업. 2009년 니혼대학 대학원 문학연구과 일본사 전공 박사전기과정 수료. 2013년 니혼대학 대학원 문학연구과 일본사 전공 박사후기과정 수료. 박사(문학). 현 요코하마시립대학 국제교양학부 준교수(副教授).

전공 분야는 일본 근대사, 미디어사. 주요 저작으로 『메이지기 일본의 민중 중국관』(후요쇼보, 2014년), 『근대 일본의 대중국 감정』(주코신쇼, 2025년), 「근대 일본의 중국 요리 수용과 대중국 감정」(『일본사연구』 719호, 2022년 7월)



손성욱(孫成旭) / SON Sungwook

2005년 단국대학교 사학과 학사. 2009년 북경대학 역사학계 석사. 2015년 북경대학 역사학계 박사. 역사학 박사. 현 국립창원대학교 사학과 부교수.
전공 분야는 중국근현대사, 한중관계사. 주요 저작으로 사신을 따라 청나라에 가다(푸른역사, 2020) 베이징에 온 서양인, 조선과 마주치다(동북아역사재단, 2022) <“盛极又衰”의 圓明園——以朝鮮使臣的圓明園經驗爲中心>, 《清史研究》 2015年第1期. <清鮮關係中清朝禮制的張力——以康熙年間清朝冊封朝鮮王世弟爲中心>, 《文史哲》 2018年第5期. <‘外交’의 龜裂과 摸索: 1860~70年代 淸·朝關係>, (韓國) 《歷史學報》 240, 2018年. <20世紀 ‘宗藩關係’論의 形成과 變容>, (韓國) 《東洋史學研究》 164, 2023年.



박삼헌(朴三憲) / PARK Sam hun

1995년 고려대학교 일어일문학과 학사. 2000년 고베대학 대학원 일본사 전공 석사. 2003년 고베대학 대학원 일본사회문화사 전공 박사과정 수료. 문학박사. 현 건국대학교 일어교육학과 교수, 건국대학교 상허기념도서관 관장, 상허교양대학 학부장.
전공 분야는 일본 근대사. 주요 저작으로 『천황 그리고 국민과 신민 사이』, RHK, 2016. A New Modern History of East Asia(Co-authored), Vandenhoeck & Ruprecht GmbH & Co, 2017, 『새로운 미래를 여는 역사』 (공저), 고문연(高文研), 2025



미야마 준이치(宮間純一) / MIYAMA Junichi

2005년 주오대학 문학부 사학과 일본사학 전공 졸업. 2007년 주오대학 대학원 문학연구과 일본사학 전공 박사전기과정 수료. 2012년 주오대학 대학원 문학연구과 일본사학 전공 박사후기과정 수료. 박사(사학). 현 주오대학 문학부 교수. 전공 분야는 일본근대사, 정치사·지역사. 주요 저작으로 『메이지유신이라는 이야기—정부가 만드는 「국사」와 지역의 「기억」—』 (주오코론신샤, 2025년) 『보신내란기의 사회—「좌막(佐幕)」과 「근왕(勤王)」 사이에서—』 (시분카쿠출판, 2015년), 『국장의 성립—메이지 국가와 「공신」의 죽음—』 (벤세이출판, 2015년)



펑먀오(馮淼) / Feng Miao

2003년 중국인민대학 역사학과에서 학사 취득. 2013년 뉴욕대학교에서 철학박사 취득. 현재 중국사회과학원 근대사연구소 부연구원. 전공 분야는 중국 근현대사, 혁명 및 전쟁의 사회문화사. 주요 저작으로 논문 「『독서생활(讀書生活)』과 1930년대 상하이의 도시 혁명 문화의 발전」 (『문학평론(文學評論)』 2019년 제4기), 「트랜스내셔널한 시야에서 본 중국 농촌 문제 - 태평양국제학회를 중심으로」 (『개방시대(開放時代)』 2024년 제4기), 단저 『근대 중국 대중교육의 흥기 1927-1937』 (사회과학문헌출판사, 2023년) 등이 있다.

문의처 : AFC사무국 afc2026@aisf.or.jp